

■松村義士男 終戦直後の混乱期に北朝鮮に取り残された日本人約6万人を救出した“引き揚げの神様”。

まつむらぎしお

大逆事件判決1911＝ 熊本県北部の飽託郡本庄村で、松村嘉次郎とミヨの三男(7人兄弟)に生まれ、赤穂浪士の討ち入りと同じ日であったことから義士男と名付けられる。

明治天皇没・1912＝ 1歳： 本庄村は、竹藪と畑の多い農村であったが、明治10年の西南戦争で戦火を免れたため、各地から人が流入して職工の町になっていた。隣接する春竹村が労働運動や水平社運動の拠点となるなかには育ち、

大暴落・・・1920＝ 9歳： 尋常小学校卒業後、父親が製材所を営んでいた北朝鮮東海岸中部の、朝鮮で労働運動が最も盛んだった元山に移住し、

原敬首相暗殺1921＝10歳： 2年前に開校した元山中学校に進学するが、

護憲三派圧勝1924＝13歳： 左翼運動のガリ版刷りの手伝いをして咎められ中退、日本窒素の興南工場に就職し、完成したばかりの油脂工場(北朝鮮東海岸は世界一の鰯漁場で鰯からの魚油をベースにした硬化油を製造)に配属、日本人、朝鮮人を問わず劣悪な労働条件で病気にでもなればすぐ解雇されるような環境で、磯谷季次と親友になり、

世界恐慌・・・1929＝18歳： 海軍軍縮条約1930＝19歳： 1930年代始めにはストライキが頻発、ソ連からの指令による地下組織も結成され、

満州事変・・・1931＝20歳： 五一五事件・1932＝21歳： 労働組合を再建しようとしたとして、磯谷ら興南左翼日本人部5人とともに検挙され、

国際連盟脱退1933＝22歳： 拷問を伴った取り調べを受けるも、3人の仲間とともに起訴猶予となり、帰国、

芥川直木賞始1935＝24歳： 日本共産党の最後の砦だった大阪の此花区にあった大阪労働学校に入学、三池炭鉱労働者の子で日本共産党員になったばかりの桑原録郎と出会い、自らは入党を拒否し続けながら、党の再建に協力、教条主義を排し、目的達成のためだけに行動するプラグマチックな性格が見て取れる。興南工場硬化油係の同僚とともに検挙された後帰国して八幡製鉄所の職工になり(九州無産者同盟組織準備委員会)を結成した波多野幸晴に声を掛けられ八幡入り、同委員会を解散させる一方、(八幡失業者同盟)と(西部産業労働組合)を合併させ、

二二六事件・1936＝25歳： 武骨な雰囲気を含み、瞳には強い意志を宿らせた風貌の、“アカ”とレッテルを貼られる筋金入りの共産主義活動家として、治安当局から注視されるアウトサイダーとなり、治安維持法により再び検挙された。

日中戦争始・1937＝26歳： 弾圧で大阪労働学校も閉校。

健保+総動員 1938＝27歳： 大政翼賛会・1940＝29歳： この間釈放され、再び朝鮮に渡り咸興に住む。建設会社(西松組)に雇われ、憲兵に付きまといながら、

日米開戦・・・1941＝30歳： 妻正子との間に長女が誕生。

敗戦・・・1945＝34歳： 日本の敗戦が濃厚となるなか召集され、終戦を北朝鮮で迎える。終戦とともに、朝鮮半島南部(北緯38度線以南)の日本人45万人はアメリカ軍政庁により翌年にかけてほとんど引き揚げる一方、北部にはソ連軍が空爆・進駐、自らも捕虜収容所に護送中に逃走するも、おそらく、(西松組)職工として在留日本人を助け、中国語・朝鮮語もペラペラだったためか、それ以上に、左翼活動をしていたことで、丁重に扱われたどころか、ソ連軍司令部の囑託になり、在留日本人にソ連軍の意向を伝える役をしていたらしい。同志磯谷とも再会し以後二人三脚の一方、(朝鮮共産党咸興市党部日本人部)の看板を挙げて、朝鮮側に黙認される離れ業。南朝鮮への鉄道を遮断、奪や暴行が横行する中で、要塞司令部に見捨てられた日本人28万人が難民化、咸興南道に押し寄せ、食糧不足、劣悪な環境、発疹チフスなどの感染症が蔓延、特に咸興では翌年にかけて約6300人が死亡する悲惨な状況で、そのほとんどが徒歩で山々を乗り越え、南朝鮮に向かって南下、

新憲法公布・1946＝35歳： *個人的に友人の引き揚げを支援などするうち、北朝鮮に樹立された新政権の中には、かつて共に辛酸を嘗めた共産主義者の知己が多かったことから、一民間人でありながら、北朝鮮に残された日本人を南朝鮮経由で日本へ帰還させるための脱出計画を立案・実行。疎開などの名目で、ソ連軍、北朝鮮当局の了解を得て、北緯38度線近くまで移動させ、朝鮮人の漁船を雇い入れ海路も使うなどして、およそ6万人もの集団脱出を成功させた。誰も考えつかなかった方策と、私的な借金までして脱出費用を工面するなど“究極の利他”を実践したことなどで、北朝鮮全土で反響を呼び、“引き揚げの神様”として知れ渡った。

新憲法施行・1947＝36歳： 見通しが立つと、自らは日本に引き揚げ故郷熊本に戻り、まもなく、長女、次女と、内縁関係にあった三宅敏子と、日本窒素から独立した旭化成の拠点延岡に移住、

極東裁判決・1948＝37歳： 正子とは離婚。

独立回復・・・1951＝40歳：

メーデー事件・1952＝41歳： 朝鮮総督府の官吏はじめ旧朝鮮関係者を中心に、日韓親善を目的に社団法人中央日韓協会が設立される。

TV放送始・・・1953＝42歳： 家族を遺して忽然と姿を消し、

国連加盟・・・1956＝45歳：

安保闘争・・・1960＝49歳：

東京リベンジャ 1964＝53歳： 脳梗塞に倒れ大阪の病院に入院、

大学紛争始・1965＝54歳：

美濃部都知事1967＝56歳： 闘病の末、没した。

1971年、中央日韓協会が、外務大臣に朝鮮半島からの引き揚げの功労者を表彰するよう作成した「功績調書」には‘北朝鮮からの引き揚げについて、日本人中最も功績のあった人物’と記され、その功績は、杉原千畝が“命のビザ”で約6000人のユダヤ難民を救ったことと比較されて、“もう一人の杉原千畝”とも評され、“利他”とは何かを再考させる、歴史に埋もれた英雄の物語として語り継がれている。